

〔平成二十六年 度 全国美術館会議 第二十九回 学芸員研修会〕

美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？／
学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？

INFORMATION AND RESOURCES STUDY GROUP
OF THE JAPANESE COUNCIL OF ART MUSEUMS

ごあいさつ

当情報・資料研究部会は、ワーキング・グループと呼ばれていた時代から、各美術館の館蔵作品・資料のデータベース化、文化財のネットワーク化の必要を訴え、その普及に意を注いできました。しかし一部の美術館を除いて、多くの美術館にとっては、実際にはその実現にさまざまな困難を抱えているというのが現実ではないでしょうか。

このような現状認識から、情報・資料研究部会は「デジタル」の視点を一旦脇に置き、各館共通の伝統的課題といえる収蔵作品目録に着目して、その全体像を俯瞰する活動に2年がかりで取り組んできました。このプロジェクトは『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』（以下、『全美目録総覧 2014』）として実を結び、2014年12月には全美のホームページで公開される運びとなりました。本研修会はこの取り組みの集大成として開催するものです。

研修会は全体を2部構成とし、第1部では『全美目録総覧 2014』の経過報告を行い、第2部では事例等報告を通じて本総覧にまつわるふたつの論点を取り上げる予定です。第1の論点は、収蔵作品目録では概ね作家名・作品名・制作年・技法・支持体・寸法といった基本項目が中心となっていますが、美術館が伝えるべき作品の情報とは果たしてそれだけで十分なのだろうかという点です。そして第2の論点は、『全美目録総覧 2014』に収録された資料はどこで閲覧できるのかという点です。後者では学芸員の調査研究基盤としての美術図書室のあり方が問題となりますが、これは同時に、前者の作品情報の中身を問うことにも絡んでくる構造的課題であると言えるでしょう。情報・資料をめぐるこのような議論が活発に展開する機会となることを願っています。

全国美術館会議
情報・資料研究部会長
越智 裕二郎
(広島県立美術館 館長)

ごあいさつ	1
広島県立美術館 館長 / 情報・資料研究部会 部会長 越智 裕二郎	
プログラム	3
『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』（全目録総覧 2014）Web 公開画面	4
『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』作成にいたる経緯と作業経過報告	6
国立西洋美術館 / 情報・資料研究部会 幹事 川口 雅子	
事例報告／三重県立美術館のホームページー作品情報を中心に	8
三重県立美術館 田中 善明	
日本の美術館ホームページにおける作品情報発信の概況	10
東京富士美術館 / 情報・資料研究部会 幹事 鴨木 年泰	
地域・人材の問題と美術情報資料へのアクセス	13
広島県立美術館 福田 浩子	
外から見る日本の美術情報資料の現在ー在外日本美術資料専門家（JAL）からの提言	16
東京国立近代美術館 水谷 長志	

平成 26 年度 全国美術館会議 第 29 回学芸員研修会	プログラム
1. テーマ	美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？／学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？
2. 主催	全国美術館会議（企画担当：情報・資料研究部会）
3. 日時	平成 27 年 3 月 9 日（月） 11:00～17:00（11:00～13:00「グエルチーノ展」自由見学）
4. 会場	国立西洋美術館 講堂 〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-7
5. 内容	11：00— 国立西洋美術館「グエルチーノ展」自由見学（—13:00 まで） 12：30—13：00 受付 13：00 開会・開会挨拶 馬淵 明子（国立西洋美術館 館長） 13：05 趣旨説明 鴨木 年泰（東京富士美術館 / 情報・資料研究部会 幹事） 【第 1 部】 13：10—13：40 『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』作成にいたる経緯と作業経過報告 川口 雅子（国立西洋美術館 / 情報・資料研究部会 幹事） 【第 2 部】 13：40—14：40 テーマ 1 「美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？」 発表 1 事例報告／三重県立美術館のホームページー作品情報を中心に 田中 善明（三重県立美術館） 発表 2 日本の美術館ホームページにおける作品情報発信の概況 鴨木 年泰（東京富士美術館 / 情報・資料研究部会 幹事） 14：40—14：50 休憩（10 分） 14：50—15：50 テーマ 2 「学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？」 発表 3 地域・人材の問題と美術情報資料へのアクセス 福田 浩子（広島県立美術館） 発表 4 外から見る日本の美術情報資料の現在 ー在外日本美術資料専門家（JAL）からの提言 水谷 長志（東京国立近代美術館） 15：50—16：05 休憩（15 分） 16：05—16：50 討 議 作品情報発信と美術情報の拠点ー課題と展望 発表者全員、討議進行：鴨木 年泰 テーマ 1 に関する討議／テーマ 2 に関する討議／質疑応答 16：50—17：00 クロージング 越智 裕二郎（広島県立美術館 館長 / 情報・資料研究部会 部会長） 17：30 懇親会（会費制） ○講堂内は飲食禁止となっております。 ○11：00～13：00の間、国立西洋美術館「グエルチーノ」展を自由に見学できます。 ○研修会終了後、懇親会を行います。（会費 2,000 円）



本『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧2014』(全目録総覧2014)は、全国美術館会議の会員各館が発行する収蔵品目録や作品選集、データベースのうち、もっとも基礎的・体系的なものを精選し、その書誌情報を収録するものです。

本総覧の刊行にいたった背景には、美術館収蔵品の情報公開をめぐるきびしい現実があります。当部会は1993年の発足当初から収蔵品の情報公開を一つの大きな柱として研究活動に取り組み、収蔵品データベースなどをめぐり研修も実施してまいりましたが、近年、部会が独自に行った美術館ホームページ動向調査からはこの10年間で収蔵品データの公開にあまり大きな進展はみられないという結果が得られました。ここから、今日の美術館の現実に向き合うならば、データベースの問題は一旦脇に置いて、冊子体の収蔵品目録の状況を整理することが先決ではないかと我々は考えるようになりました。国内所在の全作品を網羅する目録を作るのはあまりに膨大ですが、それよりも一歩手前の収蔵品目録の総覧であれば実現可能なのではないかと取り組んだのが本総覧です。

本総覧の目的は、国内の美術作品情報の集大成という大きなテーマを見据えつつ、美術作品の全国所在調査に役立つ基礎資料を作成することにあります。しかし膨大な量が見込まれる作品データを一冊にまとめるのではなく、その作品データ収集の過程で必要となる参考図書(収蔵品目録、作品選集等)を一覧にすることを当面の目標と掲げました。したがって本総覧には美術作品データではなく、収蔵品目録などの図書データが収録されています。

本総覧は2013年に実施したアンケート形式の調査「『全国美術館所蔵作品目録の目録』編纂計画 所蔵作品目録調査ご協力お願い」にご協力いただいた各館担当者諸氏のご支援によって実現しました。貴重な時間を割いて調査票にご回答くださいました皆様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。本総覧が美術情報の基盤整備に僅かながらでも貢献できれば幸いです。

● データ収集にあたっての基本方針

- 主な利用者は、展覧会準備の際に作品の所在情報を収集する学芸員等の美術専門家とする。
- 当該館の所蔵品を網羅的に把握するには何を参照すればよいかという点を重視する。選定の際には「利用者から『コレクションについて調査したい』と問われたときに案内する資料」を判断の目安とする。
- コレクション全体を網羅する総合目録の決定版がない場合には、必要に応じて作品選集、コレクション展カタログなどで代替とする。
- 過去に出版された全ての目録を追跡するのではなく、最小限の文献で最大限の作品情報に導くことを念頭に置く。目録の出版情報をまとめることは本総覧の目的ではない。
- 累積的に作品情報が蓄積される館報・年次報告書等については、作業量の軽減のため、今回は個々のケースについてはとくに言及しない(ほかにツールがない場合はこの限りではない)。
- 紙・デジタルの媒体の別は問わない。

■ その他報告書

ダウンロード

- 「全目録総覧2014」PDFデータ
(PDF: [933.4KB](#))
- 「全目録総覧2014」エクセル形式データ
(Excel: [170.2KB](#))

PDFデータとエクセル形式データは同一の内容です。取り換いのしやすいデータをご利用ください。

● 調査の経緯

データ収集調査を2012年度から2013年度にかけて実施した。1年目は東京国立近代美術館アートライブラリの蔵書を中心にして予備調査(当部会による書誌データ収集)を実施、2年目に現物調査および国立国会図書館蔵書検索システムや国立情報学研究所学術情報ナビゲーター「CiNii」によるデータ再収集作業を行った。これに基づいて内容確認のためのアンケート形式の調査「『全国美術館所蔵作品目録の目録』編纂計画 所蔵作品目録調査ご協力お願い」を実施し、その結果を踏まえてデータの修正と加工を行った。

2014年5月から6月にかけて、会員館からの修正意見を募るため、全員の会員専用サイトにおいて会員館限定試験版を公開した。これにより最終的な内容確認を行い、今回の公開の運びとなった。

● 凡例

- 調査対象は2012年度から2013年度にかけて全国美術館会議に所属した会員館を範囲とする計370館である(いずれかの年度における退会館、新入館を含む)。ただしインターネット公開に際して掲載不可と回答した会員館については除外したため、本総覧の収録数は356館、900冊である(2014年3月末現在)。
- 配列は地域順とし、概ね全国美術館会議会員館名簿に準拠した。
- 冊子体目録の掲載項目は次の通り。
編著者名『書名』版表示、出版地: 出版社名、出版年、ページ数(シリーズ名、番号) 注記 URL (冊子体の目録については、書誌情報の同定に役立てるため、国立情報学研究所CiNiiの書誌情報へのリンクを貼った)
- 原資料自体に出版地や出版年の記載がない場合には、図書館目録の慣例にしたがって【 】(角括弧)で補いつつ、推定されるデータを記載した。

● 公開日

2014年12月24日

● 掲載データに関するフィードバックのお願い

下記に掲載したダウンロードデータ(PDFデータ、エクセル形式データ)についてお気づきの点やご意見・ご感想がございましたらFAXまたはメールにてご連絡下さい。

ご意見送付先:
全国美術館会議事務局 情報・資料研究部会
FAX: 03-3828-0295 メール: info@zenbi.jp

本件に関するお問い合わせ先:
全国美術館会議 情報・資料研究部会
幹事 鴨本年泰/東京富士美術館
川口雅子/国立西洋美術館

● ダウンロード

- 「全目録総覧2014」PDFデータ
(PDF: [933.4KB](#))
- 「全目録総覧2014」エクセル形式データ
(Excel: [170.2KB](#))

川口 雅子（国立西洋美術館）

1.『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』作成プロジェクト発足の経緯

過去数年にわたって、各方面で文化財や美術作品のデータベース化・ネットワーク化の必要性が叫ばれてきた。情報・資料研究部会においても、部会発足当初から一貫して収蔵作品情報の公開というテーマを扱ってきた。

しかし部会メンバーの間で、「作品情報の出所となるべき美術館の実状を置き去りにして議論を進めているのではないか」「多くの美術館関係者にとっては現場との落差が大きいというのが実感ではないだろうか」という見方もされるようになり、近年はデータベースを中心に議論を進めていくことに限界を感じるようになっていた。

このような現状認識から、それまで注目してこなかった紙媒体の目録に焦点を当て、収蔵作品の情報公開の問題を総合的に捉え直す試みとして、『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧』（以下、『全美目録総覧』）を作成するプロジェクトの構想が浮かび上がった。これは「デジタル」の視点を一旦脇に置き、各館共通の伝統的課題といえる収蔵作品目録に着目して、その全体像を俯瞰することに取り組むものであったといえる。

2.『全美目録総覧』の概要

『全美目録総覧』は、全国美術館会議の会員各館が発行する収蔵作品目録や作品選集、データベースのうち、もっとも基礎的・網羅的なものを精選し、その書誌情報を収録するものである。主な利用者層として学芸員等の美術分野の専門家を想定し、作品の所在調査などの際に何を参照すべきかを判断する拠りどころとなることを目指した。したがって過去に出版された全ての目録を追跡するのではなく、最小限の文献で最大限の作品情報に導くことに重きを置いている。

収録範囲は2012年度から2013年度にかけて全国美術館会議に所属した会員館を範囲とする計370館である（いずれかの年度における退会館、新入館を含む）。ただしインターネット公開に際して掲載不可と回答した会員館については除外したため、最終的な収録数は356館、900冊となった（2014年3月末現在）。

掲載項目は次の通りである。「編著者名」「書名」「版表示」「出版地」「出版社名」「出版年」「ページ数」「シリーズ名」「注記」「URL」（冊子体の目録を掲載する場合は、書誌情報の同定に役立てるため、国立情報学研究所 CiNii の書誌情報へのリンクを貼った）。

3.『全美目録総覧』編纂のための調査の経緯

『全美目録総覧』編纂に際して、所蔵作品目録に関するデータ収集調査を2012年度から2013年度にかけて実施した。1年目は東京国立近代美術館アートライブラリの蔵書を中心にして予備調査を実施、2年目に現物調査および国立国会図書館蔵書検索システムや国立情報学研究所学術情報ナビゲーター「CiNii」によるデータ再収集作業を行った。

美術館によってはコレクション全体を網羅する目録の決定版がないこともあり、必要に応じて作品選集、コレクション展カタログなどで代替したが、序文等をもても出版物相互の関係や位置づけが曖昧な場合があり、どれを選ぶか判断に迷うことが度々あった。原資料自体に基本的な書誌事項の記載が欠けていることもあり、図書館目録の慣例にしたがって出版地や出版年を推定して補うなどの工夫も必要だった。

上記調査に基づいて内容確認のためのアンケート形式の調査『『全国美術館所蔵作品目録の目録』編纂計画 所蔵作品目録調査ご協力お願い』を実施し、その結果を踏まえてデータの修正と加工を行った。2014年5月から6月にかけて、会員館からの修正意見を募るため、全美の会員専用サイトにおいて会員館限定試験版を公開した。これにより最終的な内容確認を行い、公開の運びとなった。

4.『全美目録総覧』を踏まえた今後の発展の方向性

『全美目録総覧』の公開が実現したことで、国内所在の美術作品を調べるための参考図書が一つ増えたことになる。今後、美術館の所蔵作品を探す際などに活用していただければ幸いである。美術分野の文献ガイドとして、本総覧が調査研究の一助となることを強く願う。

今回の『全美目録総覧』では、国内の美術作品コレクションを俯瞰することを試みたが、美術作品の情報公開という原点に立ち帰れば、そのような検索手段の構築自体は実は究極の目的ではない。美術館にとって重要なのは、むしろ個々の作品情報の中身を深めていくことではないだろうか。作家や作品名、技法・支持体など基礎データの公開で事足りりとするのではなく、来歴情報の整備など、作品の歴史や価値をいかに伝えていくかも作品情報公開の大きな課題である。

また今回の『全美目録総覧』によって、どのような作品目録が存在するかという文献情報へのアクセスは多少なりとも向上した。しかし実践的に考えれば、問題はその文献をどこで閲覧できるかである。総覧に収録された作品目録を全て網羅する図書館というものはないが、しかしそれに近い環境を持つておくことは美術館の研究活動のさらなる発展には欠かせない。その意味で、研究基盤としての美術図書館をいかに整備するかが一層重要な意味を帯びていくといえる。

発表 1 事例報告／三重県立美術館のホームページー作品情報を中心に

テーマ 1 「美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？」 13:40ー14:10

田中 善明（三重県立美術館）

基本方針

「ネット上に公開可能な美術情報はすべて公開する。」

所蔵品（裏面やエックス線画像等を含む）、過去の刊行物（展覧会図録の文字データ、紀要、年報、美術館だより）、調査記録、イベントの記録等。

なぜ作品情報を公開するのか？

- ・情報公開によって作品の価値を上げるため。
- ・共有財産を管理する公の機関。財産を広く利用してもらうため。
- ・当館の存在や特色を知ってもらうため。

所蔵作品等の情報公開 これまでの歩み

- ・三重デジタルコミュニティイズ推進事業 1997 ～ 1999 年
データベース、HP の作成
- ・緊急雇用対策事業等、国からの補助金活用 2002 年～
所蔵品解説、定期刊行物等のテキストデータ化
所蔵図書（約 9 万 2 千冊）情報の整備
ポジフィルムのデジタル化
みえミュージアム活性化事業（新規撮影・有効画素数 3600 万画素以上）
- ・バーチャルミュージアム、館内所蔵作品・図書検索システムの作成 2003 年
- ・文化遺産オンラインに参加（所蔵品目録 2003 作成と連動）
- ・三重の歴史・文化デジタルアーカイブ（Musetheque V4）
独自ファイルサーバの破棄 2014 年 3 月 県のサーバへ一元化
- ・今年度＝グーグル・アート・プロジェクト、多言語化（やさしい日本語含む）
※システムが何度か変更されているが、基本データは継承されている。

少ない職員で如何にデジタル化を進めるか

- ・既存の資産を活用する。所蔵品の解説は作品収集説明資料や新聞連載原稿を加工。
- ・図書の新規入力は学芸補助職員（1 名）／展覧会図録や定期刊行物の入力は美術情報室に配置された監視員（1 名）に任せる
- ・所蔵品等のデータ 気づいた学芸員が献身的に追加・修正入力する！
- ・HP のデザインはかっこよくはないが、職員の誰もが操作できるシステムを優先。
- ・HP 責任担当者：定期的に交代→その人の特性を生かして内容を充実させる。
- ・県庁のシステム技術者の助けを借りる。

HP（作品情報等）充実のメリットとデメリット (?)

- ・検索すると当館の情報がよく引っかかるとの声を聞く（認知度の向上）。
- ・自館の刊行物をネットで確認することができ、調べものが便利になった。
- ・イベントや展覧会等の記録写真を残す習慣が身に着いた。
- ・災害時に役立つ。救援に来てもらう際の基礎資料として。
→地元の人にしかわからない作品の価値もある。所蔵者がその価値を発信することで、災害時に優先順位をつける際の参考になるかもしれない。さらに、作品のコンディション・リポートや額縁・表具の裂地の種類等の情報を掲載すると様々な利用できる可能性がある。
- ・出版社やテレビ局からの資料に関する問い合わせが多くなった。

今後の展望と課題

- ・HP を訪れるだけで楽になる構成（展覧会と連動したネット企画等）
- ・著作権者からの許可件数を増やす。
- ・データの整備（「来歴」等未調査項目が多い）。館外の研究にも期待すべき。

発表 2 日本の美術館ホームページにおける作品情報発信の概況

テーマ 1 「美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？」 14:10ー14:40

鴨木 年泰（東京富士美術館）

はじめに

美術館は展覧会や教育プログラム、各種イベントなどの開催の一方で、展覧会カタログや所蔵作品目録、研究紀要等の出版、近年ではホームページ等における所蔵作品情報の発信など、活発な出版・情報発信の主体としても活動している。こうした情報発信の量と質の発展傾向はこの 20 年間を振り返るだけでも作品の魅力をよりわかりやすく発信する、美術館の存在意義を社会に伝えていくといった面でますます強くなりつつあることがうかがえよう。

美術館のホームページでの作品情報発信に絞って目を向けてみても、データベースの構築そのものが目標であった時代から、今後はデータベースを活かして“何を”発信するか、という作品情報発信の質や、活かし方（活用方法）に視点が移りつつあると考えている。同時に作品情報へのアクセスの容易さ（アクセス可能性・利便性）がより一層求められつつあるということも考えていかななくてはならないだろう。

美術館の HP における情報発信において考慮しておきたいポイント

収蔵品情報の何を伝えるか（文字情報を中心に）

基本的なキャプション情報
作品解説テキスト
来歴、出品歴
参考文献、関連情報

国内の美術館の Web サイトでは、主に基本的なキャプション情報と作品解説が掲載されているという例が多い。

（作品解説情報の充実した事例）

最近はこうした基本的な情報に加え、作品の来歴や出品歴など作品のヒストリーを示す情報を掲載している美術館サイトも増えてきている。

（来歴・出品歴・文献情報等の充実した事例）

作品の検索についても、任意のキーワードを入力して検索させるという方法から、分類や特色などの検索キーワードを選べるようにしたものや、代表的な作品を簡単に閲覧できるようにしたものなど多様な検索方法を工夫したサイトが見受けられるようになってきている。

（検索の利便性に特色のある事例）

そうした意味で作品情報はどこまで掲載されているか、また、作品の検索利便性はどうかなど来館者に「届く」作品情報発信のあり方を吟味していく必要がある。

収蔵品の画像情報をどう活用するか

画質
権利問題と活用のあり方

収蔵品の画像の画質について、これまで国内の美術館サイトでは高画質な画像の掲載についてあまり積極的ではなかったといえる。画像については、著作権やその他の権利問題に関する対応も課題。

しかしながら最近では海外の著名美術館などで、高画質な画像を積極的に公開するケースが増えてきている。最近話題を集めた事例では、数万件以上の所蔵品画像を商用利用でなければ再複製可能な形で提供を始めたスミソニアン美術館などが知られている。

（高画質な画像を掲載している事例）

また画像の公開範囲についても、閲覧ができればよいという段階から、ダウンロード等で再利用ができなくては公開とはいえないという見方まであり、美術館における収蔵品画像の活用のあり方についても今後議論が増えていくと考えられる。とりわけ海外ではアクセスできるか否かから利用できるか否かという段階に向かっているともしよう。

（画像の利用に関する事例）

※一部の美術館で有料の画像貸出サービスによる収蔵品画像の運用も行われている。東京富士美術館でも 2010 年 11 月 30 日から有料画像貸出サービスの運用を試みている。

東京富士美術館では収蔵品画像の画質については作品の魅力を伝えることを主眼に現在は幅 950 ピクセルの画像を Web に掲載している。さらに高画質な画像に

ついては 2014 年 10 月 27 日より Google アートプロジェクトに 60 作品の高画質画像を掲載し閲覧利用に供している。作品情報における情報量の増大、質的向上の傾向は、画像データにおいては画質の向上に同じ傾向を見ることができるのではないか。

美術館の活動（展覧会歴など）はいかに発信されているか？
作品情報発信における展覧会情報の利用可能性

開催予定 → 開催中 → 過去の展覧会

国内美術館の Web サイトでは、開催予定の展覧会や現在開催中の展覧会についてはほぼ 100% 情報発信が行われているが、終了した過去の展覧会情報についてはあまり積極的に発信されているとはいえない。歴史のある美術館でも過去の展覧会歴を Web で閲覧することができない場合もままあり、展覧会歴を掲載している場合でも、開館当初からのヒストリーをたどることのできる例は決して多くはない。

東京富士美術館の Web サイトでは、データベースの機能を活かし、「開催予定の展覧会」、「開催中の展覧会」、「終了した展覧会」が現在日付によって自動的に移行していくようになっており、収蔵品データベースと連動して「展示予定」、「展示中」、「展示終了（出品歴）」というように情報提供しながらアーカイブとしても参照できるようになっている。

（過去開催の展覧会アーカイブの事例）
（展示中の作品情報発信の事例）
（東京富士美術館のシステム事例）

SNS・ブログ等でのリアルタイムな作品情報発信

Facebook ページを運営・活用している主な美術館：
森美術館 [37944]、国立新美術館 [14185]、国立西洋美術館 [11962]、山種美術館 [9982]、さいたま市大宮盆栽美術館 [9806]、根津美術館 [7342]、東京国立博物館 [6482]、青森県立美術館 [5650]、十和田市現代美術館

[5535]、メナード美術館 [5457]、東京富士美術館 [5318]

※[] 内は 2015 年 1 月 19 日現在の「いいね！」数

※2015 年 1 月現在、国内 60 館の美術館の運営する Facebook ページを確認（筆者調べ）

美術館の現場ではそれまでいくつかの館が活用していたブログに加えて、ツイッターや Facebook が新たな情報発信ツールとして話題になり始めたのはようやく 2010 年ぐらいからである。（※注）その後 Facebook ページ等の SNS などを活用して情報発信に取り組む美術館が増え、最近筆者が確認したところでは約 60 館の Facebook ページを確認できている。こうした情報発信ツールを使って収蔵品情報を発信している事例も増加傾向にある。

多言語での情報発信

日本語
英語
その他の言語
多言語運営のコストの問題

国内美術館の Web サイトでは、日本語のみでの発信をしている館が多く、英語、その他の言語での情報発信についてはかなり限定的といえる。多言語でのサイトを運営している場合も、その館の基本的な情報のみ 1 ～数ページ以内ぐらいの情報量で固定的に掲示のみしているという事例が多く見受けられる。英語での情報発信に限ってみても、日本美術の作品情報を英語に翻訳する際の難しさがネックになっているなどの声を聞くことも多い。特に日本美術についてなど、日本語のみの発信に偏っている現状をよしとするのではなく、日本の美術品（または日本国内にある美術品）に対する海外からのアクセス可能性を著しく低くしてしまっている課題認識から出発しなくてはいけないだろう。この問題は作品情報のみならず、各館が意欲的に取り組んでいる展覧会についても英語タイトルがない場合が多くあることなども指摘しておきたい。

どのような作品を所蔵し、どのような展覧会が開催されているのか、日本語が理解できなくては知ることが著しく困難になっているという状況を踏まえていきたい。（多言語発信に特徴的な事例）

東京富士美術館では2012年に行ったWebサイトの全面的リニューアルにより、日本語・英語の2カ国語を中心に他言語を加えた7言語のサイトを設置した。現状では言語により発信する情報量に差があるものの、今後も継続して積極的な多言語情報発信に努めていきたいと考えている。

（東京富士美術館の言語別サイト概要）

まとめ

美術館の情報発信に際し、どのような利用者を想定し、どのようなサービスを考えるか、という視点は今後ますます重要になってくると思っている。最低限度の発信から発信内容の質を問う段階へという変化に美術館の現場もますます目を向けていかななくてはならないのではないだろうか。そして筆者がそのように感じている部分の多くは、全国美術館会議における研究部会のような美術館職員の横のつながり、またそうしたネットワークにおける情報交換・交流によって学び、課題に取り組んできたことによって得た部分が大変に大きかったことを付言しておきたい。

情報発信というと、ともすれば広報的な文脈で語られることが多いようでもあるが、美術館にとって特に重要なコンテンツである作品情報発信の基盤を整備することは、つまるところ収蔵品管理の基盤整備であり、作品に付随するテキストを利用可能な形に整理保存することでもある。この一連の取り組みがうまく連携し実行力のある形で実現することによって初めて美術館外部からの収蔵品へのアクセスが保証される。これはまさに美術館活動の基盤を整備することといっても過言ではないだろう。展覧会の集客実績などに目が向きがちな近年の美術館をめぐる環境の中にあって、一見地味なようであるが、積極的な作品情報発信によって所蔵コレクションの魅力を高めることこそが美術館のプレゼンスを高めることであるという認識が今こそ求められているのではないだろうか。

※注

全国美術館会議 第25回学芸員研修会「美術館の情報発信 参加する、つながる、共有する、ウェブの新時代」（2010年3月12日）において今後の情報発信ツールとしてツイッターやFacebookが話題になっている。

【参考データ】

2013年3月、情報・資料研究部会による全国美術館会議会員館359館（当時）のホームページ調査が実施された。この調査により、所蔵作品情報の発信について、下記の興味深いデータが得られている。

所蔵作品のデータベース公開館は57館、16％
コレクションページがある館は183館、51％
コレクションページがない館は119館、33％。

〔調査結果に見られたユニークな作品情報発信の事例〕

・作品情報発信のスタイル・方法に関するもの
作品リストをPDFファイルで公開／エクセルの作品リストダウンロード／文化遺産オンラインへのリンク

・作品情報発信の内容・質に関するもの
基本情報以外に、来歴・出品歴・文献情報も掲載／研究者向け資料を掲載／高精細画像を掲載／X線撮影画像掲載／展示中作品情報の掲載

・作品情報発信のユーザー体験向上に関するもの
様式・テーマ、学芸員オススメなど多様な検索／地図や年表を活用した検索／人気アクセスランキング／サムネイル画像による全点インデックス表示

発表3 地域・人材の問題と美術情報資料へのアクセス

テーマ2「学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？」14:50—15:20

福田 浩子（広島県立美術館）

1 このテーマが現れた発端

全国美術館会議 情報・資料研究部会編『全国美術館会議会員館 収蔵品目録総覧 2014』（『全美目録総覧 2014』）は、全国美術館会議の会員各館が発行する収蔵作品目録や作品選集、データベースのうち、もっとも基礎的・網羅的なものを精選し、その書誌情報を収録したものである。2014年3月末時点で356館、900冊を含む。『全美目録総覧 2014』には、webに公開された館蔵品データベース41件のURLも掲載されている。エクセル版ではクリックでリンク先へ飛べる。CiNii Books（大学図書館などの本を探すサイト）へのリンクがあるのは印刷物799件で、リンクなしは106件である（ただし、中にはCiNii Booksで検索ヒットするものもある）。



図1 エクセル版『全美目録総覧 2014』

さて、『全美目録総覧 2014』に掲載されているのは二次資料の書誌情報であって、一次資料である目録そのものではない。CiNii Books リンクから所蔵先を探すことはできるが、実物はどこに行けば見られるのか。それは案外ハードルが高いのではないかというところからこのテーマへ辿りついた。

2 地域に美術情報の拠点を作るために

広島県立美術館は、中国地方の美術館としては比較的大きな公開図書室を持っている（約6,000冊公開、約3万冊所蔵）。昨年度、情報発信力の増強を目指し、展覧会カタログの開架式閲覧室と情報専門職員の配置を目玉とした図書室大規模拡張を画策し、意気揚々と予算要求したもののあっさり却下されてしまった。全

国の多くの美術館図書室が抱えている課題と思われるが、当館は図書を管理する司書スタッフが不在である。また、公開図書室・書庫ともにスペースに余裕はなくパンク状態で、かつ、1996年のリニューアル・オープン時に導入した図書管理システムは故障した際に予算不足のため復旧できず、現在非稼働状態の状態である。

3 地域から美術情報へアクセスするための方法

東京などの図書館や情報施設に近い場所から離れた地域から、例えば『全美目録総覧 2014』掲載の美術情報へアクセスするための方法を考えてみると、まず、①美術館（自館）の図書室・蔵書があり、②地域の美術館（他館）の図書室・蔵書があるが、実際に利用可能かは別問題である。そして、③地域の公立図書館・大学図書館が考えられる。他地域へ出向くことができるなら、④関東・関西の美術館公開図書室・公立図書館・大学図書館がある。webで蔵書検索できる館として、「美術図書館連絡会（ALC: Art Libraries' Consortium）加盟館」（現在は、神奈川県立近代美術館、国立新美術館、国立西洋美術館、東京国立近代美術館、東京国立博物館、東京都江戸東京博物館、東京都現代美術館、東京都写真美術館、横浜美術館の蔵書を横断検索）や兵庫県立美術館美術情報センター、愛知芸術文化センターアートライブラリーなどがある。また、美術館や図書館を利用する以外に、新本・古本を公費購入する方法もある。予算がほとんどない当館のような場合は、新本・古本を私費購入あるいは個人蔵資料に頼ってしまうこともあるかもしれない。資料の私費購入は長い眼で見れば、美術館にとって決して望ましいとはいえない。私費購入した資料は業務に必要なために入手したにもかかわらず、学芸員の世代交代後に館に資料が残らないからである。さらに、最近ではインターネット上の情報が増加する傾向にあり、pdfデータへのアクセスの可能性も増している。

4 居ながらにして情報を入手する手段の一例

国立国会図書館蔵の情報資料

来館しないで利用できるサービスを利用するために、登録利用者（個人）は必須である。国立国会図書館のweb サイト、貸出、複写について、簡単に紹介しよう。

- 国立国会図書館サーチ（NDL サーチ）
<http://iss.ndl.go.jp/>



図2 国立国会図書館サーチ 詳細検索画面

全国の公共図書館、公文書館、美術館や学術研究機関などが提供する資料、デジタルコンテンツを統合的に検索できるサービス。

- 国立国会図書館所蔵資料の貸出
http://www.ndl.go.jp/jp/service/lending_service.html

図書館間貸出制度に加入申請し、承認を受けた機関（公共図書館など）で閲覧できる。ただし、複写不可（資料返却後に遠隔複写サービスを利用する）。

- 遠隔複写サービス
<http://www.ndl.go.jp/jp/service/copy3.html>

来館することなく複写を申し込み、郵送又は宅配便で複写製品を受け取ることができるサービス



図3 書誌情報画面 この画面から遠隔複写サービス申込画面へ入っている

○国立国会図書館の機能とサービスを支える納本制度

国立国会図書館法（昭和23年法律第5号）により、国内で発行されたすべての出版物を、国立国会図書館に納入することが義務づけられている。部数は機関や法人の区分によって異なる（例：都道府県・政令指定都市の機関は5部、市は3部、町村は2部など）。国立国会図書館に納本しておけば、書誌情報が掲載され、貸出や複写サービスなどが提供されるメリットがある。

公共図書館・大学図書館

図書館相互サービスを利用するための窓口としても活用できる。

CiNii Books

<http://ci.nii.ac.jp/books/>

全国の大学図書館などが所蔵する本（図書や雑誌など）の情報を検索できるサービス（国立情報学研究所）。



図4 CiNii Books トップページ

Google ブックス

<https://books.google.co.jp/>

ポータルサイト Google 内で提供している、書籍の全文検索サービス。

カーリル

<https://calil.jp/>

全国6000以上の図書館から書籍とその貸し出し状況を簡単に横断検索できるサービス（他にも類似システムあり）。



図5 カーリル トップページ

5 美術情報・資料にアクセスしやすい環境を作るために

全国各地に美術情報の拠点となる美術館・図書館があるのが理想かもしれないが、スタッフ（司書知識のある専門職員）不足、スペースと設備の不足、資料購入予算の確保難など程遠い状況である。

一方で、発行者側が少し配慮することで、出版物を広く活用してもらうルートを作ることができる。各館の出版物（目録、年報、紀要、ニュース、図録など）にアクセスできるルートを発行者側が確保しておくことが重要である。

国立国会図書館などに納本しておけば、web 検索システムに乗せることができるだけでなく、遠隔複写サービスなどの利用対象となる。

出版物を作ったら、次のような図書館・図書室へ送付することを美術館関係者にご提案したい。

- 国立国会図書館
<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/deposit/deposit.html>
送付先は発行団体によって異なる。
詳細は web で確認を
- 美術館のある都道府県立・市町村立図書館
- 美術館のある地域の大学図書館
- 東京文化財研究所
- 美術図書館連絡会 ALC、兵庫県立美術館、愛知芸術文化センターアートライブラリーなど、図書館機能が充実している美術館図書室

近年は予算難のために送付できないあるいは送付先を減らす館が増えているが、せめて上の美術館や図書館に送付することを継続すれば、美術館関係者だけでなく一般利用者からも各種資料へのアクセスがかなり確保される。

学芸員（研究者）にとって、情報を持つこと、情報の入手方法を知っていることは大きな力であり、美術館活動の質の向上につながっていくと信じる。また、情報を入手するだけでなく、情報を確かに伝えていくことが重要である。

はじめに

JAL2014「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」
「平成 26 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）」

事業実施期間：2014.12.01-12.11

公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」

JAL2014 最終日 2014.12.11 開催 於、東京国立近代美術館講堂

1. What is JAL?

JAL とは？

Japanese – art librarian, archivist, curator and related scholar

2. What is JAL Project?

JAL プロジェクト「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」とは？

海外の JAL を公募し、選考して 7 名を招へいし、2014 年の 12 月 1 日～12 月 10 日、東京・京都・奈良を巡り、日本美術資料情報の機関を見学して、意見交換する

3. What are Aims of JAL Project?

JAL プロジェクトの目的とは？

- (1) 日本と海外の JAL のネットワークを構築する
Networking between JALs in Japan and those abroad
- (2) 海外の JAL のネットワークを促進する
Promotion of networking among JALs outside Japan
- (3) 日本の美術情報資料の基盤を客体化する
Review and rethinking of Japan’s art-information infrastructure from an international perspective

4. Scope of Japanese-art and Candidates of JAL 2014

日本美術の範囲と招へいの候補者

日本美術： 写真・映像・マンガ・デザイン・建築等の視覚芸術全般を含む

招へい者： 図書館員に加え、日本に関わる視覚資料の扱いを専らとするアーキビスト、ヴィジュアル・リソース・キュレータ等も招へいの候補者に含める

5. Collaborations with Overseas Organizations

海外関連組織期間との連携

(1) IFLA（国際図書館連盟）美術図書館分科会
2014 IFLA 美術図書館分科会
パリ・サテライト・ミーティング
IFLA リヨン大会

(2) ARLIS/NA など各国美術図書館協会

(3) 日本研究資料専門家組織
NCC： 北米日本研究資料調整協議会
EAJRS： 日本資料専門家欧州協会
2014 EAJRS ルーヴァン大会参加

(4) その他関係機関

ロンドン大学 SOAS(the School of Oriental and African Studies) / プラハ国立美術館および国立博物館 / ブカレスト大学日本語学科 / 立命館大学アートリサーチセンター

6. Seven Invitees of JAL 2014

氏名（所属機関）「WS における発表題目」

- (1) 長谷川 -Sockeel 正子
（フランス国立ギメ東洋美術館図書館）
「Věra Linhartová の仕事と蔵書から学ぶもの」
- (2) 岩瀬可奈子
（ハワイ大学マノア校美術学部）
「海外における日本美術画像資料の利用促進に向けて」
- (3) カワイアイエア・藤田幸代
（ホノルル美術館図書館）
「アメリカ側から見た日本 収集？公開？そして未来へのビジョンは？」
- (4) 吉村玲子
（米国スミソニアン協会フリーア美術館図書館）
「北米における日本美術研究と図書館：現況と課題」
- (5) 足立アン
（フリーランス）
「1960-1970 年代の実験映画とビデオ作品のアーカイブ、保存と配布：日本に適した取り組みと問題について」
- (6) 平野明
（セインズベリー日本藝術研究所図書館）
「日没處の日本美術図書館」
- (7) 市川義則
（パリ国際大学都市日本館図書室）
「研究者の視点からの『提言』」

7. How JAL 2014 Invitees Know Cultural Information Strategies in Japan, now?

「招へい者へのアンケート」が示す日本の「情報発信力」の課題

WebcatPlus / CiNii / 国立国会図書館サーチ / 近代デジタルライブラリ / 日本美術作品レファレンス事典 / 日本美術年鑑 / 国立国会図書館レファレンス共同データベース / 国立美術館所蔵作品総合目録 / 展覧会カタログ総覧 / 国指定文化財等データベース / ALC / 文化遺産オンライン / DNP Image Archives / 東文研総合検索 / 美術家書誌の書誌 / 中国絵画所在情報データベース / 想 -IMAGINE / カーリル / e 国宝 / nihuINT

8. Commentaries

コメンテータの指摘

発信力のために：情報集約 + 英語化 + オープン化

ビジョンとは？：何を 目指して
何を 誰に向けて
どのように

9. Some Typical Recommendations from JAL 2014 Invitees

招へい者の主要な提言から

- (1) 日本美術の概説的研究書の外国語（とりわけ英語）への翻訳の必要性（長谷川，吉村）
- (2) 画像利用に関わるアクセスとユースのための環境整備の必要性（岩瀬）
- (3) CJK（Chinese-Japanese-Korean）における J の後退、その結果としての日本美術の相対的遅延停滞傾向（平野）

10. Toward More Effective Dissemination of Information on Japanese-art

日本美術に関わる情報発信力の向上のために

見える化 Visualization

ポータルからプラットフォームへ
From Portals to Platforms

集中と分散 Integration and decentralization

アクセスの困難は

海外（から）だから / だけ じゃない

美術館は「何を」「どこ（誰）へ」

「どこで」 見せる / 伝えるのか

美術館のライブラリは「何を」「どこ（誰）へ」

「どこで」 資料提供するのか

…etc.

まずは「市井の人」の目線から見直すことから

【参 考】

E1643 - JAL プロジェクト 2014：公開ワークショップ
＜報告＞

[国立国会図書館] カレントアウェアネス -E, No.274, 2015.01.22
http://current.ndl.go.jp/e1643

東京国立近代美術館情報資料室長・水谷長志

2014 年 12 月 11 日、東京国立近代美術館において「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」実行委員会主催の公開ワークショップ「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」が開催された。本実行委員会（会長：加茂川幸夫東京国立近代美術館長）は、東京国立近代美術館のほか国立西洋美術館、国立新美術館、東京国立文化財研究所の委員からなり、「平成 26 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）」により、海外日本美術資料専門家（司書）（Japanese-art librarian：JAL）を招へいして、研修、交流を実施した。

2014 年の 6 月以降、国際図書館連盟美術図書館分科会（IFLA-ALS）、北米日本研究資料調整協議会（NCC）、日本資料専門家欧州協会（EAJRS）等のメーリングリストにより公募情報を告知し、9 月初旬に招へい者を選考した。その結果、7 名の JAL が 11 月末に来日し、10 日間の東京、京都、奈良における研修、交流を経て、本事業のまとめとして、「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」を試みた。

招へいプレゼンターの氏名（所属）と「提言のタイトル」は次の通りである。長谷川 -Sockeel 正子（フランス国立ギメ東洋美術館図書館）「Věra Linhartová の仕事と蔵書から学ぶもの」、岩瀬可奈子（ハワイ大学マノア校美術学部）「海外における日本美術画像資料の利用促進に向けて」、カワイアイエア・藤田幸代（ホノルル美術館図書館）「アメリカ側から見た日本 収集？公開？そして未来へのビジョンは？」、吉村玲子（米国スミソニアン協会フリーア美術館図書館）「北米における日本美術研究と図書館：現況と課題」、足立アン（フリーランス）「1960-1970 年代の実験映画とビデオ作品のアーカイブ、保存と配布：日本に適した取り組みと問題について」、平野明（セインズベリー日本藝術研究所図書館）「日没處の日本美術図書館」、市川義則（パリ国際大学都市日本館図書室）「研究者の視点からの『提言』」。

招へい者の提言に先立ち、実行委員の水谷が、JAL の範囲と応募資格、本プロジェクトの概要を述べ、特にその目的を、

(1) 日本と海外の JAL のネットワークを構築する、(2) 海外の JAL のネットワークを促進する、(3) 日本の美術情報資料の基盤を客体化する、の 3 点に要約した。さらに近年の日本における美術関係資料・情報の基盤整備の進行があるにもかかわらず、必ずしも有効な情報発信がなされておらず、それは今回の招へい者においても日本の美術情報の基盤について十全には知悉されていないという現状にもあらわれているという趣旨の基調報告を行った。招へい者の提言に対しては、林理恵（国際文化会館図書室長）と小出いずみ（渋沢栄一記念財団実業史研究情報センター長）がコメントした。

招へい者による「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言」において、特徴的であったのは次の 3 点である。第一は日本美術の概説的研究書の外国語（とりわけ英語）への翻訳の必要性（長谷川、吉村）である。いまだに 1970-80 年代の翻訳書が米国における日本美術研究の入門的テキストとして利用されており、以後の研究成果を含んだ翻訳書の不在が日本美術の教育研究を阻害している要因であることが指摘された。第二は画像利用に関わるアクセスとユースのための環境整備の必要性（岩瀬）である。NCC による「海外日本研究者の画像利用事情」に関わるシンポジウム（2008）等の取り組みがあるにもかかわらず、教育目的の画像利用などにおいて多くの課題があることが Visual Resources Librarian の立場から訴求された。第三は、欧米の美術関係機関においては学芸部門も図書部門も多くは東洋美術として括られて部局が設置されており、いわゆる CJK（Chinese-Japanese-Korean）が中核となるが、その中で、J の専門職員が今世紀に入り多くのポジションにおいて CK に替わられている実態があること、その結果として日本美術の振興および研究に相対的遅延停滞の傾向のあることが、事例をもって示された（平野）。

以上の 3 点は日本美術に限らず、海外の日本研究の全般において敷衍されることはコメント（小出）においても指摘されたように、今日重大な課題となっている。

ささやかではあるが、日本美術の資料に関わる情報発信力を今後とも一層強化拡大する方策の一助として、今後とも多くの地域からの招へい者を得て、本 JAL プロジェクトを継続できることを願っている。

なお、本プロジェクトの概要と公開ワークショップにおける招へい者、コメントータの報告は、冊子としてまとめて刊行し、あわせて東京国立近代美術館の JAL プロジェクトのサイトに 2015 年 3 月末を目途に公開する予定である。

平成 26 年度 全国美術館会議 第 29 回学芸員研修会 予稿集
美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか？／
学芸員は美術情報資料をどこで入手するのか？

編 集	全国美術館会議 情報・資料研究部会
発 行	全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-7 国立西洋美術館内 TEL : 03-3828-0290 FAX : 03-3828-0295 URL : http://www.zenbi.jp
発行日	平成 27 年 3 月 9 日
印 刷	株式会社 プリンテック